

朝さろんの本棚〈3〉

田辺聖子『言い寄る』について

3rd morning : 2011年8月25日 (木)

参加者 : 8名

【テーマ】

＜恋愛模様の変遷を考える＞ その3 (完)

【田辺聖子 (たなべせいこ)】

1928年(昭和3)大阪府大阪市生まれ。83歳(2011年現在)。淀之水高等女学校を経て樟蔭女子専門学校(現大阪樟蔭女子大学)国文科卒。幼少時から古典文学に親しみ多くの少女小説を愛読。戦時中(13歳~17歳)は愛国心にあふれた軍国少女としての時代を過ごし、戦争で死ぬことを本望としていた為に「長命の相をしている」と言われて激怒したという出来事を回想している。敗戦後ではその反動と喪失感から複雑な思いを抱く中、古典文学の世界に癒しを見出した。大阪の金物問屋に就職で勤める傍ら文芸同人の『文芸首都』『大阪文学』に参加。恋愛をテーマにした小説や大阪弁を用いた一種の方言文学の制作に取り組んだ。1964年(36歳)に『感傷旅行』で第50回芥川賞に選出され、若手女流作家の寵児となる。1995年(67歳)紫綬褒章、2000年(72歳)文化功労者、2008年(80歳)文化勲章をそれぞれ受賞。2006年(78歳)『田辺聖子全集』完結。

私生活では長年独身であったが、文学仲間の川野彰子への追悼文を寄せたことが縁でその夫で神戸で医師をしていた川野純夫と知り合う。1966年(38歳)に後妻として川野と結婚、翌年兵庫区荒田町で夫の家族と同居し、2002年(74歳)に死別するまで36年間連れ添った。

【ストーリー】「乃里子」もの/「乃里子」三部作

ハイ・ミスの玉木乃里子を主人公とした、『言い寄る』『私的生活』『苺をつぶしながら』は三部作になっている。1965年(昭48)~1981年(昭56)の間に連載・発表され、特徴的な大阪弁を駆使した軽妙洒落な恋愛小説として多数の読者を獲得した。

■『言い寄る』(「週刊大衆」昭和48年7月~12月:連載)

乃里子、31歳。フリーのデザイナー、画家。自由な一人暮らし。愛してないのに気があう、金持ちの色男・剛、初めての悦楽を教える大人、趣味人の渋い中年男・水野など、いい男たちに言い寄られ、恋も仕事も楽しんでいる。でも、痛いくらい愛してる五郎にだけは、

どうしても言い寄れない…。

“言い寄る”にはどうすればいいのか。——解放された性にめざめながら、現代の恋に生きる若い女性の切なくも明るい人生を、軽快な感覚で描いた長篇恋愛小説。

■『私的生活』（「週刊現代」昭和51年5月～8月：連載）

乃里子、33歳。わたしの私的生活は、彼に侵されてしまった。財閥の息子・剛と結婚した乃里子。高台のマンションで何でも買える結婚生活、しかしここは「私」の生きる場所ではないと気付いていく。辛く切ない大失恋のあと、剛から海に見えるマンションを見せられて、つい「結婚、する!」と叫んでしまった乃里子。結婚生活はゴージャスそのもの。しかし、金持ちだが傲慢な剛の家族とも距離を置き、贅沢にも飽き、どこかヒトゴトのように感じていた。「私」の生活はどこにあるのか。

「愛してる」よりも「もう愛してない」と告げることの、難しさ…。ほろ苦く温かい恋愛小説。

■『苺をつぶしながら』（「小説現代」昭和56年9月～12月：連載）

乃里子、ピッカピカの35歳。剛との結婚解消とともに中谷財閥からも解放されて、仕事も友情も取り戻した乃里子。一人暮らし以上の幸せってないんじゃない？ 結婚生活から「出所」して、ふたたび一人に。しかし自分の将来の姿もなぞらえていた女友達に悲しい出来事が。そのとき手を差し伸べてくれたのは…。

人は自分が愛したもののことは忘れても、自分を愛した人のことは忘れない。「誰か」がいるから、一人でも生きていける。愛と人生のすばらしさを教えてくれる名作。

【ポイント】

■連載媒体

当時、主に関西圏での新規読者開拓を狙っていた大衆週刊誌「週刊大衆」の編集部より恋愛小説の依頼があり連載がスタート。「なるべく難しくなく、読みやすいものを」という主旨の執筆注文だった。

この小説の読みやすさ、当時としては進歩的な乃里子の女性造形、情愛を積極的に楽しむ若者を大胆に描いていることなども、ある程度、読者層を想定していたと考えられる。

■軽妙な関西弁

「私が小説を書きはじめた昭和二十年・三十年代は、文壇でも一般社会でも大阪弁は市民権がなく、偏見の風当たりは強かった。（中略）ことに<恋愛小説を大阪弁で書けない>という声があった。私は不思議でならなかった。大阪の若い者だって恋をする。恋をするときだけ、東京弁（標準語や共通語という言葉が社会に浸透するまでは、大阪人は”東京弁”

と呼んでいた)を使うのであろうか。そう咄嗟に東京弁が出るのであろうかとおかしかった。
(中略)「よーし、大阪弁でサガン書いたろ」と思った。」(「小説と大阪弁」より)

■ハイ・ミスという存在

田辺自身の来歴から考えると、戦後を17歳で迎えた彼女の眼に、焦土の上にひとりで立つ戦争未亡人や恋人を亡くした女性の姿がどのように映ったのか想像に難くない。田辺小説に度々登場するハイ・ミスとは、結婚適齢期を迎え、それを過ぎてもおお、独身を生きる女性のこと。それは決して結婚や恋愛に縁がなかった、という人物ではなく、お見合いや縁故での結婚が半数を越えた時代にあって恋愛を謳歌し、ひとり身の軽やかさや楽しさを存分に味わっている存在。

現代であればアラサーにあたる乃里子も、このハイ・ミスとして描かれる。このハイ・ミスという存在に、現代の読者から共感を得る部分が大きいのではないか。

■フリーデザイナーという女の生き方

往時、結婚適齢期というものが厳然と存在していた背景には、女性の自立、社会進出、終身雇用(もちろん「男女雇用機会均等法」なども)といったものがまだまだ定着していなかった。女性のライフコースとして、もっともポピュラーかつ大多数が選択した/せざるを得なかったのは、定職に就いた男性との結婚、妻として生きること。そのため男女双方の結婚機会が熟す年齢層、出産を想定する年齢層というのがかなり具体的に設定され、結婚適齢期・妙齢、というような制度でない制度が根強く存在していた。

そうした環境下で女性がハイ・ミスとして独立を獲得し、その権利を謳歌するためには、金を得る必要があった。しかし職業は当然限られる。乃里子が選んだのはデザイナーという職。

乃里子ものと呼ばれるこの三部作を考える際に、この奔放さや洗練さ、余裕を生み出している背景として、「デザイナー」という乃里子の肩書きは見逃せない。同時に、そのような都市のノマド(?) (=いまでいうくクリエイティブ・クラス)の持つ人的交流、友人関係の輪がいかにか特徴的なものかも併せて考える必要があるのではないか。

【〈恋愛模様の変遷〉を考える】

- ★#1『キッチン』(1988年設定)、#2『肩ごしの恋人』(2001年設定)と接続してみる
 - ・生き方、恋愛観に変化が見えるか?
 - ・社会の様子は私たちの目にどう映るか?
 - ・「恋愛小説」のイメージに、変化はあったか?
- ★〈恋愛(小説)〉を自分なりに定義してみる。

【ひとこと】

文学とは何か、文学の「読み方」はあるのか、というような問いかけを、少しは体験できただろうか。今まで、本を“どのように”読んできたか。または“いかに読むか”について考えたことはあったか。

ひとりで「読む」ことと、朝さろんのような形式で「読む」こととの間には、どのような相違があるのか。職業・世代・価値観を越えた、人生の友人たちと共に「読む」ことの意義は何か等々。これらの問いを自覚的に考えることを通じて、〈みんなで読む・話す・考える〉という朝さろんの目的を明確にしつつ、その〈愉しさ〉の一端を味わっていただけたらいいな、とおもう。

※参考文献

- ・『田辺聖子全集 6：言い寄る/私的生活/苺をつぶしながら』（2004）
- ・『田辺聖子：戦後文学への新視覚』（「国文学解釈と鑑賞」別冊）（2007）
- ・中周子（他）（2009）「文学の「読み方」はあるか：田辺文学の教材化の試み」
- ・小谷博泰（2008）「田辺聖子作品における関西方言について」
- ・浅井清（編）（2000）『新研究資料現代日本文学』
- ・菅聡子（編）（2006）『日本女性文学大事典』
- ・上野千鶴子（1992）「『恋愛』の誕生と挫折」